

# 『古今小説』研究

—「川」のもつ「境界」としての力—

岩 田 和 子

## はじめに

「川」は、それを挟んだ向こう岸や遠方各地への移動手段、遊覧など、〈実世界〉において人々の暮らしに密着し、利用されている。一方、虚構の〈小説世界〉では、ことに中国明代の小説集『古今小説』では、「川」はしばしば事件が発生する場でもある。幽霊が出現したり、殺人が起きたりと、異様なまたは、奇妙な事件が繰り返し起こる。その事件によって、滔々と流れていた日常は忽ちのうちに非日常となる。「川」は、日常と非日常の「境界」として、〈異世界〉への入り口という、日常から切断された特殊な場としても存在するのである。このことについては、安藤信廣氏が「漁翁と仙人が〈水辺〉や〈市場〉に出没するのは、そこが神霊の世界と人間の世界との《境界》だったからである。〈水辺〉は《異界》そのものであることも多いけれど、より強く《境界》領域として

の特質を示す<sup>注1</sup>」と述べている通りである。

また、「川」は人々の往来によって「水の道」となる。人々に踏み固められながら土地と土地を繋いでいった「道」は、時空を越えてあらゆるものを繋ぐ役割があった。<sup>注2</sup>つまり「川」は、日常から隔絶された非日常の〈異界〉として、あるいは〈異界〉への〈境界〉として、更にまたあらゆる時空を繋ぐ特異な場として、何か特別な力をもつ空間だったのではないか。その状況を、『古今小説』の作品世界中に追求しようとするのが、本稿の試みである。

本稿で考察する『古今小説』は、明末天啓年間の一六二一年から一六二七年にかけ、馮夢龍（一五七四―一六四六）によって編纂された白話短編小説集のひとつである。百二十種の話四十篇ずつ三部に分け、それぞれ『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』と名付けて出版された。後に『古今小説』は『喻世明言』と改称され、三部は総称して「三言」といわれる。

馮夢龍の「三言」の編纂意図として、大木康氏は、「警世」と「読者である民衆の教化」と、「登場人物の真率な心情に根ざした純粹な行動」<sup>注3</sup>への賛美を挙げ、また小野四平氏は、馮夢龍の小説観として「民衆の心をとらえてはなさない魅力と面白さを持つ、『庶民の文芸』としての小説の性格に関心と理解を示し、そして、愚劣なものでなく民衆の教化に役立つものでなければならぬと考え<sup>注4</sup>ていた」と述べる。

馮夢龍の生きた万暦年間には、旧来の礼教の価値基準を排斥し、人欲を肯定した思想家、李卓吾が出現し、彼の唱えた「童心説」(「童心」——子供のような無邪気な気持ち——の発露を、最も尊ぶべきものとする考え)が当時の知識人に大きな影響を与え、社会風潮ともなった。馮夢龍も彼に傾倒し、影響を受け、小説中に「真情」「至情」などの言葉をよく用いたのだとされる。<sup>注5</sup>

しかし大木氏は、「馮夢龍をはじめとして、明末の人々も因果応報の理を実際に信じていた」し、また「三言」における因果応報・勧善懲悪の話の筋は「社会が危機に瀕していた明末にあつては、深刻な現実的意味を持って」おり、そういった「人々の共通の問題意識」や、「危機感が根底にあったからこそ、馮夢龍は因果応報のわく組みを持った教戒的な作品を書いた」<sup>注6</sup>のであると述べ、それらの作品が決して「真情」「至情」の表現という方向だけに流れ

るものではない、と指摘する。その上で氏は、「三言」作品の意義と魅力を、「人間の心理への興味と因果応報、勧善懲悪の理法にもとづいた教戒性、あるいは個人の『情』と社会の『理』、この両者が調和し共存しているところ」<sup>注7</sup>にある、と述べる。

しかし、果たして作品の魅力の所在は、「個人の『情』と社会の『理』の調和と共存」にあるのだろうか。『古今小説』を読み進めるとき、「調和と共存」よりは寧ろ、それぞれの作品のもつ暴力性や破壊性のほうが私には目につく。この小説集を「調和と共存」という秩序性の中で読むことに、抵抗を感じるのである。『古今小説』の魅力は、「調和と共存」ではなく、もう少し別の所にあるのではないだろうか。その一例として、先に述べたように「特殊な《境界》空間」である「川」が、物語において「調和と共存」を破壊し、日常とは違う次元を開く際にみせる特異な力を追求してみたいのだ。

本稿では、『古今小説』二十七卷「金玉奴棒打薄情郎」(金玉奴棒もて薄情郎を打つ)を中心的に取り上げて上記の問題を検証し、明代白話短編小説の〈小説世界〉の魅力を解明していきたい。

## 一 「乞丐」という身分

「三言」の各篇の構成は、冒頭に「詩詞」或は「入話」「本話」

の導入部。「本話」開講までの時間埋め、場慣らしの役目を持っていた。<sup>注8</sup>）があり、聴衆の注意をひきつけながら「本話」に入っていくという、「説話」（語り物）の形式を受け継いでいる。

二十七巻の物語は、冒頭から「勸世上婦人、事夫盡道、同甘同苦、從一而終；休得慕富嫌貧、兩意三心、自貽後悔。」（世の中の婦人に、夫に仕えて婦道を尽くし、苦樂をともにし、一生夫に従って再婚しないことを勧めるものです。富にあこがれ貧を嫌い、あだこうだと考えて、後悔することのないように。）という、話者による婦女に対する訓戒の口上と、以下のような「入話」から始まる。

買臣という、立身出世を志し、薪を売りつつ学問に励む男がいた。彼には妻がいたが、出世の見込みがない彼を見限り、再婚する。しかし、買臣は五十歳にしてようやく郡の太守に任命された。太守着任の日、前妻は道端から太守の顔を見て驚く。なんと買臣ではないか。再会し、せめて妾にして欲しいと願い出るが、覆水盆に返らず。妻は世間の人々から笑いにされ、恥ずかしさの余り川に投身自殺する。

これを踏まえて話者はまた、「這個故事、是妻棄夫的。如今再說

一個夫棄妻的、一般是欺貧重富、背義忘恩、後來徒落得個薄倖之名、被人講論。」（これは、妻が夫を棄てたお話です。今もうひとつ、夫が妻を棄てたお話をしましょう。貧を卑しみ富を重んじて、義に背き恩を忘れ、後にただむなしく薄情者と呼ばれて、陰であれこれ言われるだけとなった、というものです。）と、これから始まる「本話」の大筋を、道德的立場から紹介する。これによつて聴衆は、話者による〈教化〉を受けながら、「本話」を聞くことになる。

「本話」の前半のあらすじはこうである。

貧乏書生の莫稽は、大金持ちの乞食の親方の娘金玉奴と結婚し、散々世話になりながら、科擧に合格したとたん、妻の身分に嫌気がさし、赴任の途中、同行していた金玉奴を船から突き落として殺そうとする。<sup>注9</sup>

具体的な検証に入る前に、まず「乞丐」（乞食）について触れておきたい。物語は、時代を宋の紹興年間と設定し、その頃の賤良概念と「乞丐」の身分について、話者の見解の表明から始まる。

若數著「良賤」二字、只說娼、優、隸、卒、四般為賤流、到

數不著那乞丐。看來乞丐只是沒錢、身上卻無疤痕。

もし、「良民・賤民」という分けかたからすれば、娼妓、役者、奴隸、兵卒の四種だけが賤民であつて、乞食を数えることはできないのだ。見てみるに、乞食というのはただお金が無いだけで、体には傷が無いのである。

：雖然被人輕賤、到不比娼、優、隸、卒。

：（乞食は）人々から輕視されているとは言つても、娼妓や役者、奴隸や兵卒とは違ふのである。

話者は「乞丐」に対し「賤（賤流）」でも「良」でもない特異なものという認識を示し、「乞丐」の社会的地位に対する言及を避け、中間的な立場をとる。しかし、いくら話者が「乞丐」を、「娼、優、隸、卒」とは違ふので「賤（賤流）」ではない、と主張したところで、世間は「乞丐」を「輕賤」（輕視する）のである。そして話者はそれを否定しない。つまり承認している。「乞丐」は、結局は人々から卑しめられる存在であり、ほとんど「賤（賤流）」なのだ。ここでは、良民・賤民の定義付けが重要なのではなく、人々が共通して持つ潜在意識——「輕賤」（輕視する）という差別意識——が重要なのである。そして、人々がもつ「乞丐」に対する差別意

識と「賤（賤流）」ではないという自意識との矛盾が、金父娘とその婿莫稽に与えた影響は大きい。そこに着目し、〈金老大と金玉奴〉〈莫稽〉〈意識と川〉という三つの視点から、この物語の〈結末〉を考えていきたい。

## 二 金老大と金玉奴

金老大は、乞食達から「團頭」と呼ばれる乞食の親方であり、仲間からだけでなく世間の人々からも広く愛称として「團頭」と呼ばれていた。金老大は、乞食でありながら金持ちだったので、生活レベルでは庶民をゆうに凌いでいたが、「乞丐」という身分に属していれば、〈世間から卑しめられる立場〉なのである。その「乞丐」から抜け出し、〈世間と対等に付きあえる立場〉になりたいという「有志氣」すなわち「階級離脱の志」<sup>注10</sup>から、金老大は「團頭」の名義を一族の金癩子に譲ることで、乞食たちとは縁を切つていた。

然雖如此、里中口順、還只叫他團頭家、其名不改。

そうではあるが、町の人々はこれまでの口癖で、相変わらず乞食の親方と呼んで、改めないのである。

口癖とはいえ、依然として人々は金老を「團頭」と呼ぶ。「還只叫」という表現からは、呼び方を敢えて改めようとしないう「里中」の人々の意識がみえる。所詮「團頭」は「團頭」にすぎないといったふうには、むしろ、故意に改めないようにしているとさえ感じられるのである。

そこで金老大は、小さな頃から文芸に励ませ才色兼備に育て上げた娘の玉奴に、「階級離脱の志」を達成する為の望みをかける。つまり婿探しである。方々あたって「士人」と結婚させようと画策するのだが、「乞丐」という身分が邪魔をして、名門貴族の貰い手を探すのは難しかった。精一杯の婿選びをした結果、出世の見込みはありそうだが、明日の生活もままならないという、切羽詰った状況にある貧乏書生の莫稽との結婚にこぎつける。全ては父のエゴによるものであったが、それについて彼女は、何の疑問も持たずに結婚を受け入れる。この時はまだ、彼女は父老大の庇護の下で大事に育まれ、守られ、そして操られていた。

ところが、彼女も自分の身分を目の当たりにして、それを自覚し、羞恥心を覚えた時、初めて自我が生まれる。すると父親の手を離れ、自分の意志で行動し始めるようになるのだ。それは、読書人ばかりを招いた披露宴に招かれなかった玉奴の叔父である金癩子が、五く六十人の乞食を引き連れてやってきた時の事だった。

その時の様子が、詩詞の挿入によって表現される。

|           |                |
|-----------|----------------|
| 開花帽子、     | ぼろぼろ帽子に、       |
| 打結衫兒。     | よれよれひとえ。       |
| 舊席片對著破氈條、 | 古い蓆に破れ毛氈。      |
| 短竹根配著缺糙碗。 | 竹の杖には欠け茶碗。     |
| 叫爹叫娘叫財主、  | 右や左の旦那さま、      |
| 門前只見喧嘩；   | わめき散らすは門の前。    |
| 弄蛇弄狗弄猢猻、  | 蛇まね犬まねサルのまね、   |
| 口内各呈伎倆。   | 口々に腕前自慢する。     |
| 敲板唱楊花、    | 拍板鳴らして歌う蓮花落、   |
| 惡聲聒耳；     | 惡声ぎやあぎやあやかましく。 |
| 打磚搽粉臉、    | 顔にべたべた煉瓦の粉、    |
| 醜態逼人。     | その醜態は身に迫る。     |
| 一班潑鬼聚成群、  | 惡さ鬼ども集まれば、     |
| 便是鐘馗收不得。  | 鐘馗様でも手が出まい。    |

挿入詞は、「情景や一段落の押さえなどに利用して、本来は、これを弾唱あるいは詠吟したものであろう」という特徴をもつ。詩詞に描写された生々しく色鮮やかな情景とその弾唱は、読

み手（聞き手）の視覚と聴覚を刺激し、乞食たちの異様な様子が眼前に活き活きと浮かびあがってくる。それらは映像としてはつきりと眼内に残り、また騒々しい音の余韻は内耳に留まり、彼らの様子は印象的なものとなる。さらに乞食たちは、「揀好酒好食只顧吃」（うまい酒と料理を選つてひたすら食べ）、傍若無人に暴れ回る。まるで「乞丐」であることを捨て去ろうとする者に対し、乞食とはいかなるものかを知らしめようとするかのものであり、卑しめられているものもつ誇り、貴さすら感じられる。また、金癩子の言葉「你也是團頭、我也是團頭」（お前も親方だし、おれも親方だ）、「論起祖宗一脈、彼此無二」（元をただせば同じ血筋じゃないか）、「我就不是親叔公？坐不起凳頭？」（おれは叔父じゃないと言うのか？同じ席に座れないと言うのか？）、などからも分かるように、彼からすれば、同属であり血縁でもある身内から差別視された屈辱、怒り、嫉妬などもあっただろう。

驚愕したのは、招かれていた読書人たちである。一斉に宴席から逃走し、婿の莫稽さえも仲間と一緒に逃避した。この様子を目の当たりにした玉奴は、叔父の仕打ちにショックを受け、部屋の奥へ逃げ込み隠れて泣く。しかし、その涙は「氣得兩淚交流」（悔し涙をながす）なのである。自分が「乞丐」であることに對する強い憤りや羞恥心からの、悔し涙であった。決して「乞丐」であ

ることには對する恥ずかしさに、泣き寝入りしてしまうのではない。すぐさま「只恨自己門風不好」（自分の家柄が良くないのをただ遺憾として）と、その悔しさをばねに、「要掙個出頭、乃勸丈夫刻苦讀書。」（何としてでものし上がってやろうと、夫に一生懸命勉強するようせきたてた。）と夫の出世に全てをかけるのだ。この事件を期に、「乞食」であることに對し羞恥心を抱いた玉奴は、父の意思によつてではなく、自分の意思で階級からの脱却を図ろうとする。ここで、父の「志」は確実に娘へと受け継がれ、かつて金老大が玉奴を育てあげたように、玉奴は夫を科挙試験に合格させるべく、彼の學問に惜しまず投資をする。

その甲斐あつて、莫稽は見事合格し、民衆と隔絶した特権をもつ身分が与えられた。科挙合格は、士大夫と民衆、支配者と被支配者という新たな隔絶——国家という絶対權力に基づく侵すことのできない隔絶——を、彼らにもたらしたのである。莫稽は支配者となり、乞食を含めて民衆は被支配者となる。彼が無為軍の司戸に任命され、赴任地へ出發する日の前の晩に壮行の宴席を設けたが、金癩子ら乞食たちはもう結婚披露宴の時のように暴れ込んで来なかつた。金老大、玉奴父娘の目指していた、階級離脱——「乞丐」という（世間から卑しめられる立場）からの脱出——に成功した瞬間であつた。

### 三 莫稽

さて、論の焦点を、婿として白羽の矢が立てられた莫稽に変えてみたい。

貧乏な彼は当初、一文も使わずに美しく優秀な妻を得られたうえに、衣食に事欠かない生活ができたとあつて非常に満足していた。「乞丐」であるということについては、「顧不得恥笑」(体面なんかかまっていられない)と、全くといっていいほど、意に介さなかった。それは、彼がひどく貧乏で、社会的身分も科挙受験者である「秀才」という不確実なものだったからだろう。

そのような彼も、披露宴に叔父が暴れ込んだきた一件には、「心中未免也有三分不樂」(内心面白いはずがなかった)と「乞丐」に対して一抹の不安を覚えた。そのぼんやりとしていた「乞丐」への不安は、科挙試験合格後、舅の家に戻ってきた時から、確実に不満へと変わっていく。

烏帽宮袍、馬上迎歸。將到丈人家裏、只見街坊上一群小兒爭先看來、指道：「金團頭家女婿做了官也。」莫稽在馬上聽得此言、又不好攬事、只得忍耐。

烏帽をかぶり宮袍を着て、馬上ゆたかに帰ってきた。舅の家

まで来ると、通りには子供たちが先を争い見にやって来て、莫稽を指さし「やあい、金親方の御婿さんがお役人になったぞ。」と口々に言った。莫稽は馬上でこれを耳にしたものの、かかずあうわけにもいかず、ただじつと耐えていた。

出世しても結局「乞食の親方」の娘婿なのである。子供からぶつけられた言葉「金團頭家女婿做了官也。」は、莫稽及び金老大・玉奴に対する民衆の意識そのものを物語っていた。莫稽は「乞丐」である金父娘のおかげで勉強に専念ができ出世することができたはずである。しかしその義理が吹き飛ぶほど、子供の言葉は彼を動揺させるものだった。恐らく、大人たちの間において既にそう噂されているのだろう。だから子供たちも、当たり前のようにこのせりふを吐いたのである。これにより莫稽は、自分は賤民の出身でもないのに、更には士大夫層となった今でも、依然として賤民扱いをされているのだ、という現実を知る。これは、彼にとつてひどく屈辱的なことであつた。舅と会つても「雖然外面盡禮、卻包著一肚子忿氣」(表面では丁寧に挨拶したものの、腹が立ってたまらず)、心の中でも「可不是終身之玷!」(まさに一生の恥だ!)、「被人傳做話柄」(物笑いの種)と思い、「乞丐」と血縁関係になったことをはつきりと悔やむばかりとなる。

結婚当初は貧乏書生で、まだ「乞丐」という身分よりは生活の安定を求めている莫稽にとって、金癩子が結婚披露宴に暴れ込んできた時感じたものは、「三分不樂」(何となく面白くない)であった。その時彼は、心にある程度の余裕をもって乞食達の様子を見ることができ、「乞丐」に対してそれほど否定的な意識を抱いてなかった。しかし今は、「心中快快、只是不樂」(心中鬱鬱として、ただただ面白くなかった)と、「三分不樂」とは明らかに違う「不樂」を感じたのである。地位も生活も保証された身となった莫稽にとって、玉奴はただの恥部でしかなくなってくるのだ。

玉奴は夫の様子の異変に気付くのだが、階級離脱の達成によって既に心の充足を得た彼女は、「正不知甚麼意故」何が原因なのかさっぱり見当がつかない。夫の苦悩にまでは気が付かないのである。金老大・玉奴父娘と、莫稽の間に「乞丐」をめぐる意識のズレが生まれる。そのまま後日二人は、川を移動しながら赴任先へと向うのであった。

ここで、地の文において、話者が一言こう述べる。

只想著今日富貴、卻忘了貧賤の時節、把老婆資助成名一段功勞、化為春水、這是他心術不端處。

ただ今日の出世ばかり考えて、貧困時代を忘れ、妻の助けで

名を成したその功勞も、水泡に帰してしまふ、これは彼の心根正しくないとある。

ちらりと見せる莫稽の心の動揺や、彼自身の力だけではどうすることも出来ない情況への苛立ち、葛藤を否定するように、彼を非難し、その勝手さ、エゴを責める。この物語の「入話」で述べられていた「欺貧重富、背義忘恩、後來徒落得個薄倖之名」(貧を卑しみ富を重んじて、義に背き恩を忘れ、後にただむなしく薄情者と呼ばれて、陰であれこれ言われるだけである)という構成員図に外れないよう、この物語の正しい読み方を意図的に読者に諭そう、という態度が窺える。それだけでは片付けられない人間の心理的葛藤を、あらかじめ教訓で打ち消すのだ。だが作品世界はそれよりも大きく、登場人物の内面は話者の教訓を逸脱している。

#### 四 意識と川

それでは、莫稽が玉奴を川に突き落として殺そうとした場面をみてみたい。

彼は妻を連れ、臨安から水路一本でいける赴任地、無為軍(安徽省無為県)へ向った。数日後、船は「采石江」の辺りに停泊する。



其夜月明如晝、莫稽睡不能寢、穿衣而起、坐于船頭玩月。四顧無人、又想起團頭之事、悶悶不悅。忽然動一個惡念、除非此婦身死、另娶一人、方免得終身之恥。心生一計、走進船艙、哄玉奴起來看月華。玉奴已睡了、莫稽三遍他起身。玉奴難逆丈夫之意、只得披衣、走至馬門口、舒頭望月、被莫稽出其不意、牽出船頭、推墮江中。

その夜は、月が明るくて昼間のようだった。莫稽は寝つけず、着物を着て起きあがり、船の舳先に座って月を眺めていた。辺りには人影もない、そのうちまた乞食の親方のことを思い出し、ももんまと暗い気持ちになった。ふと、ある悪念が生じた。あの女さえ死んでしまえば、他の女を娶り、ちやうど一生の恥から免れることができるのだが。心に一計を案じ、船室に入っていくと、玉奴を起こして月を見ようと言った。玉奴は既に眠っていたが莫稽がどうしても起きろと言つて聞かない。玉奴は夫に逆らうわけにもいかず、衣を羽織つて、船室の入り口へ行き、顔を出して月を見上げると、そこを莫稽に不意をつかれ、船の舳先に連れ出され、川の中へと突き落とされた。

「四顧無人」、あたりはしんと静まり返つて誰もいない。「其夜」は月の光がとりわけ明るく、昼間のように浩々と水面を照らす。

そこにゆらゆらと漂う繋がれた一艘の船。寝付けない彼は、月明かりに誘い出されるように船上で月を愛でていた。莫稽の眼下には、眩い月明かりに照らし出されて微妙に揺れ動く水面が広がる。ゆらゆらとした水面の揺れ、波紋が次第に彼にも伝わり、彼の意識はざわめきをみせる。いつしかまた「團頭之事」（乞食の親方のこと）つまり、子供に道端から「金團頭家女婿」と言われたことを思い出し、憂鬱になり始める。まるで、水上に停泊している船のように、彼の心は同じところをぐるぐる回る。

すると、「忽然動一個惡念」、妻を殺そうという悪念が「忽然」として起こった。「忽然」とは、「突然、表示事物來得迅速並且出乎意外」<sup>注12</sup>という「思いがけない」、「意想外」の意を含んだ副詞である。

莫稽は、玉奴との結婚を後悔して不快になり、何とか離婚することはできないものかと思案してはいたが、さすがに彼女を殺そうとまでは思っていなかった。少なくとも船に乗り、赴任地へ向うまでは。そして船で川を移動中に、采石江で停泊するまでは。

だから、彼の「妻を殺そう」という「惡念」は彼にとって「意想外」のものであったし、惡念から引き起こされた「川に突き落とす」という行為も、「意想外」であった。それでは、彼にとって、それは全くの無意識の行動だったのかといえ、そうとはいえない

い。前節で追ってきたように、彼が殺人行為に至る一定の動機は、玉奴と夫婦となり、共に過ごして来た過程で、潜在的なものとして着実に培われていた。そうであるから、予想外であるにもかかわらず、眠っていた玉奴を無理矢理にでも起こし、強引に船室から連れ出して突き落とすまでの一連の行動には、まるで始めからそうする計画があったかのような、何の躊躇もない強さがあったのだ。

ここで、「忽然」という話の持つ性質について少し考えてみたい。「忽然」は、前述したように「たちまち、突然」という意味である。『説文解字』によると「忽、忘也、従心、勿聲。（忽は忘なり、心に従う、勿の聲）」である。また、「忽」を音としてもつ「颺」は、『説文解字』によると「颺、疾風也、従風忽、忽亦聲（颺は疾風なり、風忽に従う、忽は亦聲）」である。ここから分かるように、「忽」には「疾風」の意味は無い。しかし、猛烈に吹きつける風の音、「さあつ」と吹きつけるような、その様な音のイメージがあるのではないだろうか。それは、『説文通訓定聲』において「忽、仮借為颺（忽は仮借して颺と為す）」と、「忽」と「颺」が仮借関係であるとされることから、考えられるのだ。

つまり、物語中に、「忽然」という目に見えない「風」が「さあつ」と吹きつけることによって、莫稽の、抑制していた理性の糸がぶ

つりと切れたのである。そういうイメージがここから喚起されるのである。

「推墮江中」（川に突き落とす）という「忽然動一個惡念」から揺らぐことなく進められる殺人行為は、一見「忽然」という表現によって、思いがけないこと、突発的な出来事のように感じられるが、実は「忽然」という〈見えない風〉によっても、確実に後押しされたものだった。「川」という〈場〉で、心の奥底に潜んでいて表出することのない意識の〈静〉なるものと、それを抑圧することなく行為する——ここでは殺人であるが——〈動〉なるものの「境界」にいた莫稽は、月明かりに照らし出され、「川」の水面に浮かびながらゆつくりと、その潜在する意識の激しい揺れを、またそれを具現化せんとする力を感じる。すると、ギリギリの心理状態に追い込まれた莫稽の緊張の糸はぷつりと途切れ、彼はその恍惚状態の中、潜在する自己の判断を下し、表面では理性によって抑制されていた自己の「境界」を越えたのだった。

すぐさまここで作者から、一息つく形でこの場面についての教訓めいた詩詞が挿入される。

只為團頭號不香

ただ「乞食の親方」の聞こえ悪く

忍因得意棄糟糠

世に出れば棄てる糟糠の妻

天縁結髮終難解

夫婦の縁そうそう切れぬ

贏得人呼薄倖郎

薄情者と呼ばれるだけよ

サブリミナルのように、何処かで同じような言い回しが出てきたなと聞き手は考える。ここでも、「入話」の中に出てきたフレーズ、「欺貧重富、背義忘恩、後來徒落得個薄倖之名」が自然と思いつき起されてくるのだ。物語世界、登場人物へと聞き手の意識が傾いている中盤で、弾唱、詠吟しながら教訓の詩を挿入する。それと共に聞き手の意識は現実へと引きもどされる。溢れ出るだろう聞き手の様々な感想、思考は操作され、倫理道德の枠組みへと物語はスイッチしてゆく。

## 五 結末

さて、後半のあらすじはこうである。

夫から突き落とされた玉奴は、偶然赴任先に向う途中に采石江を通りかかった許徳厚夫妻に助けられる。彼らは彼女から出来事の一部始終を聞くと、彼女を憐れみ自分の養女とする。許徳厚は莫稽の上司となる人物だった。赴任してからも玉奴のことは一切口外せずに、許徳厚は彼女の婿探しを始め

る。彼の部下達は、莫稽が若くして夫人に先立たれたことを以前から聞いていたので、口をそろえて彼を推薦する。莫稽は、上流の家柄と縁を結びたいと思っていたところに上司との縁組ができると聞き、喜んでこの話に飛びついた。ところが、式を終えて花嫁の部屋に行ってみると、花嫁は自分が殺したはずの玉奴だった。

玉奴は、相手を知らされずに再婚を勧められた時、前夫への貞節に従いたいという理由から拒否する。しかし、相手が莫稽であると知り、受け入れたのである。そしていざ対面の瞬間、莫稽を下女らに殴らせ、自分は泣き喚いて彼を罵り倒す。「薄情者、薄情者」と。許徳厚夫妻の仲裁で夫婦はまとまり、以前以上に仲良く暮らし、親孝行もしっかりした。これも変えられぬ因縁なのである。

これは、人情として解し難い、不自然な結末であるとされる。尾上兼英氏はこう述べる。

再婚の相手が夫であることを知った妻が、上役の娘と結婚するつもりで意気揚々と来た男を、腹いせに女中を指揮して殴らせる、そこで當然決裂となるべきところ、雨降って地固

まる式に「夫婦和好、比前加倍」と團圓するというでたらめさであるが、「婚縁前定枉勞爭」(切るに切れない因縁の糸)が作者の解釋であり、當時の女の位置をよく物語っている。<sup>注13</sup>

また今西凱夫氏は、

たとえ自分を殺そうとした夫でも操を守らねばならぬ。そしてその夫とならば、もう一度連れ添ってもそれは正しい行為なのだ。彼女の知っているとする「礼教」なるものこそ、彼女の人間性を奪ったものだということは彼女の心には爪の先ほども浮かばないのである。

とし、

「礼教」を教えこまれた金玉奴が、いかに自主性なく自らの「感情原理」すら歪められてしまったか<sup>注14</sup>

という観点からこの結末を分析している。

いずれも礼教と照らし合わせて、当時の社会における女の貞節を考えるものであるが、これはあくまでも話者の意図にそった解釈であり、この物語のもつ本質を述べ切れていない、と考える。金玉奴は礼教の犠牲になったとは思えないのである。彼女は再婚を

一度拒否する際にこう述べる。

奴家雖出寒門、頗知禮教。既與莫郎結髮、從一而終。雖然莫郎嫌貧棄賤、忍心害理、奴家各盡其道、豈肯改嫁、以傷婦節。私は卑しい家の出ではありますが、道理のわきまえはあります。いったん莫稽と夫婦になりましたうえは、一生その妻で通す覚悟です。たとえ莫稽が貧賤を嫌って、残忍な仕打ちをしましても、私は私で女の道をつらぬきます。どうして再婚などして、貞節を破ることができましょう。

自分を殺そうとした夫に対して貞節を誓ったこのせりふは、尾上氏が述べられているように、「『礼教』が愛情のない結婚生活の継続を主張し、それに殉ずることによってしか女の生きる道がないことを示している」<sup>注15</sup>のかもしれない。また、今西氏が述べられているように、「彼女の心は教えこまれた儒教倫理によって染めあげられてしまった」ので、「この型通りのせりふは口先だけの言葉ではない。彼女はまともにこれを信じている」<sup>注16</sup>のかもしれない。そうであれば彼女は、礼教によって感情原理を押さえ込まれてしまうという思想統制を受けた、つまり礼教の犠牲となったと言えるだろう。

ところで、莫稽を殺人者にならしめたものは、彼をそこまで追い詰めたものは何だったのか。

「團頭」を父に持つ彼女の身分であった。彼女は披露宴の席で叔父が乞食を引き連れて暴れ込んで来たことを悔しく思い、彼女ひとりでは到底できない身分からの離脱を、夫の莫稽に託したのである。夫の学問への並々ならぬ投資は、決して玉奴の無心からくる献身行為ではなかった。根底には父から受け継がれた「階級離脱の志」があった。そうして莫稽も出世をし、彼女の期待に応えたのである。ここでいったん莫稽は彼女へ恩を返したのではないのか。それなのに彼は、やはり人々から「乞食の親方の婿が役人になった」と、民衆と隔絶した支配者層になった今も、「乞丐」というレッテルを貼られたまま、揶揄され続けなければならない運命だったのだ。このような彼の深層の意識を、玉奴はあの采石江で停泊中に、殺されそうになったことで初めて気付いたのだった。

だからこそ彼女は「卑しい家の出ではございますが」「たとえ莫稽が貧賤を嫌って」と、今までずっと否定し、払拭しようとまでしていた自分の身分を、この場ではっきりと口に出し、諦めとも取れる形で認めてしまう発言をしたのである。

彼女が貞節を守る理由は、幼い頃から教えこまれた「礼教」という観念が、彼女の精神を支える基本としてあるからかも知れな

い。だがそれ以上に、彼女の階級離脱の志の所為で、結果的に彼を殺人行為へと追い込んでしまった、そのような彼を理解するのとで生まれた、彼女の彼への強い自責の念や、深い情愛からのものだった。離ればなれになり、一人で時間をかけて莫稽のことを考えるうちに、玉奴はようやく彼の置かれていた複雑な立場や心情を知ることができた。二人で任地へ赴く前、彼が見せた様子の異変について、その理由がさっぱり分からなかった、分かうともしていなかったあの頃とは、今はもう違うのだ。じんわりと、彼女の胸に充足感、安堵感、また喜びが広がっただろう。そして、莫稽という人間を認め、受け入れたのである。だからこそ彼女は、莫稽と再会した時、「あんなにしてあげたのに」「誰のおかげだと思っているの」「薄情者」と彼を散々罵るけれど、ただ罵るだけではないのである。言葉としては言い難かったが、彼に対する、前述したような思いが確かにあったのだ。それらが絡みあって、この時流した涙「放聲而哭」（声をあげて泣く）となったのではないか。そして彼も「满面羞慚、閉口無言、只顧磕頭求恕」（顔中恥ずかしさでいっぱい、口をつぐんで声も出ず、ただひたすら平身低頭して許しを請うた）と、彼女と再び対面してようやく、自分の勝手さに気付くのである。お互いにお互いのエゴを認め合い、そして更に、金玉奴が莫稽を礼教の観念に縛られることなく思い

やることができた。このことが、夫婦再縁の大団円へと繋がっていったのだろう。そして、彼らを再び巡り合わせ、繋いだのが、他ならぬ「川」だったのだ。

井波律子氏は、『三言』の世界における復讐のテーマのひとつとして、いわゆる復讐譚の系譜には属さないものであると断りを入れて、この物語の結末についてこう述べている。

莫稽は士大夫的虚栄のために、金玉奴を殺そうとしたのだから、その犯罪は並たいていのものではないのだが。しかし、ヒロイン金玉奴は、こうした夫の犯罪性を憎悪するよりは、嘲笑するのである。そもそも、花嫁姿の金玉奴を見てふるえあがり、「幽霊だ」と絶叫する莫稽など、大上段にふりかぶった復讐の対象にするには、あまりに滑稽で卑小にすぎる。復讐という重いテーマを、登場人物に一滴の血を流させることもなく、このような喜劇タッチで描く作者の姿勢には、人の心の地獄を知りつつ、それをサラリと笑い流してみせる、一種成熟したものが認められる。

さらにこう述べている。

制作年代のあとさき、スタイルの相違を越えて、ここに見られる復讐はいずれも自己犠牲とは無縁である。それは、傷つけられた存在が、泣き寝入りをしない精神を以て敢行する、自己回復の為の行為に他ならない。「三言」的復讐の論理は、まさしく自己回復の論理なのである。<sup>注17</sup>

この、「三言」の復讐の論理は「自己回復」である、という井波氏の意見を仮に承認するとして、その「自己回復」のとらえ方について、もう少し詳しく分析したい。

莫稽が新しい花嫁を前妻であると確認した時、肝をつぶして「有鬼！有鬼！」（幽霊だ！幽霊だ！）と喚きちらした。その光景に「衆人都笑起來」（人々は皆笑い出した）のである。周囲の人々の力が作用して、この場面は明るさを保つことができる。期待に胸を躍らせ新婦の元へやって来た莫稽が、死んだはずの前妻と再会するこのくだりは、莫稽にとって悲惨だが、滑稽でもある。また、自分を殺そうとした相手に対する玉奴の復讐行為にも、ちっとも陰惨さを感じられない。なぜなら、復讐行為へと及ぶ以前の夫婦生活において、お互いがお互いを傷つけ合い、犠牲を払い合ってきたことを、「川」での事件——これは莫稽の復讐だったといえる——を機に、玉奴は知るようになり、自分と相手の双

方が持っている人間のエゴに気付いたからである。莫稽もまた、再会の場で玉奴の涙の訴えから自分のエゴに気付き、それを越えて、お互いを思いやることができたのだ。こうして二人はお互いにお互いを回復し合うことで、自己の回復を果たすのである。だからこそ「夫婦和好、比以前加倍。」（夫婦は以前にも増して仲睦まじく暮らしました）というこの結末を迎えられた、と考えられるのである。

### おわりに

この物語は、教戒色を正面に出した「入話」で始まり、「本話」では話者によって適宜教訓が挿入され、倫理道德の枠組みに従って進んでいるようであるが、倫理観で拘束しようとするればするほど、その中に存在する「川」の、強い解放性が浮き彫りにされる。日常と非日常の「境界」である「川」は、〈小説世界〉において、人間が、理性によって抑圧されていた自我を解放する、自己の「境界」を越えることを可能にする、特異な力を有した「境界」空間だった。そして、その人間の人格をも、がらりと変容させたのである。

莫稽の突発的にみえる——ここでは川に突き落とす——行為も、実は一定の動機をもっていた。その動機は、表立った意識で

はなく、人間が生きる過程から得る経験によって、意識の奥深くで静かに、着実に、確かに刻まれ、無意識のうちに痕跡となって残るものである。無意識の動機の積み重なりが、心の内奥に収まりきれないという情況に達した時、それは意識化され、肉体的な行為へと移行する。

「川」において、自己の潜在意識と肉体的な行為との「境界」に立った莫稽は、その「境界」としての「川」のもつ特異な力によって、微妙に保っていた自己の「境界」のバランスを崩された。人間にとって潜在的であり、心の奥深くにありつづけることの可能だった情念が、「川」という〈場〉において解放されたのである。莫稽の心は、水面にたゆたいながら逡巡と煩悶を繰り返し、行きつ戻りつするうちに、螺旋を描くように追い込まれ、徐々に自然な流動を失っていった。しかし、彼が「川」という「境界」にいたから、浩々とした月明かりに照らし出された「川」の水面を見ていたから、物語に風を吹かせる「忽」という感覚を感じ、何もかも忘れた恍惚状態の中、「川」のもつ「境界」としての特異な力によって、彼の心は具体的な形となり、更にはつきりした意志をもったものへと変容していったのである。行為となって表出したのは、殺人行為という最悪のものであったが、それを最悪のままにしておかないのも「川」だった。

「川」は自ら物語の展開の〈場〉ともなるが、物語の新たな展開を運び、それらを繋ぐ。そうして繋がった、「川」によって導かれた、夫婦再縁という大団円を、不自然なものと断定してしまうことはできない。既成の道德観念によって抑えつけられた、諦めともとれるような消極的な結末であると断定することもできない。一見非常にねじれてはいるが、自主性をもった人間達が、お互いを認め合い、思いやって生まれた結末でもあるのだ。

既成の道德観念による呪縛は、「川」で起きた事件によって一度に破壊され、人間は価値判断の無化された場に無造作に放り出される。すると、彼らは自分たちの力で、本来もっている自主性を取り戻し、自己の本質を模索し、人間としてあるべき姿を見つけて出していくのである。このような〈場〉を提供する「川」は、秩序だった「調和と共存」を打ち崩し、因果応報・勧善懲悪の枠組みを動かし、物語全体を動かす原動力となるのである。そして、話者によって押し進められる因果応報・勧善懲悪という教戒性、それを越えた、物語の広がりが成立する。ここにこそ、明代白話短編小説の〈小説世界〉の魅力があるのだ。

## テキスト

『喻世明言』 許政揚 校注（人民文学出版社 一九五八年）  
本文中の日本語訳は、抱甕老人編 駒田信二・立間祥介訳『今古奇観 4 明代短編小説集』（東洋文庫261 平凡社 一九七四年）を参照した。

## 注

注1 安藤信廣「俳優・仙人と漁翁——中国の演劇の特性について——」（法政大学文学部紀要四十号 一九九四年）

注2 白川静『詩経』（中央公論社 一九七〇年）三十三頁において白川氏は、周南「卷耳」をとりあげ、「卷耳を摘み終えてそれを周行におくのは、その道の果てにある遠人への魂振りのためである」と述べている。

注3 大木康「馮夢龍『三言』の編纂意図について——とくに勧善懲悪の意義をめぐる——」（東方学第六十九輯 一九八五年）及び、同氏の「馮夢龍『三言』の編纂意図について（続）——真情——より見た一側面——」（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院 一九八六年）

注4 小野四平「馮夢龍の小説観——『三言』成立の背景ノート——」（集刊東洋学第六号 一九六一年）

注5 李卓吾による思想的影響については、傳承洲著 周兆新審定『馮夢龍與通俗文學』北京大學中國傳統文化研究中心（大象出版社）十八頁、二十二頁を参照した。

注6 注3の前者に同じ

注7 大木康『明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化』（講談社選書メチエ



一九九五年)

注 8 抱甕老人編 千田九一・駒田信二訳『今古奇観1 明代短編小説選集』

(東洋文庫34平凡社 一九六五年)「解説」

注 9 井波律子『中国のグロテスク・リアリズム』(平凡社 一九九二年)

注 10 今西凱夫「三言研究(二)」(日本大学人文科学研究所研究紀要 第三十二号 一九八六年)で今西氏は、金老六の「有志氣」について、「娘の玉奴に学問をつけ、そしてどうしても士人の所に嫁入らせようとしていた、つまり階級離脱を計ったのだ」と述べているので、ここでは「有志氣」を「階級離脱の志」とした。

注 11 注 8 に同じ

注 12 『現代漢語詞典』(商務印書館)

注 13 尾上兼英「明代白話小説ノート―短編小説・『三言』(一)―」(東洋文化研究所紀要第四十四冊 一九六七年)

注 14 今西凱夫「三言研究(二)」(日本大学人文科学研究所研究紀要第三十二号 一九八六年)

注 15 注 13 に同じ

注 16 注 14 に同じ

注 17 注 9 に同じ

(いわた かずこ 二〇〇三年日文卒)